

口唇口蓋裂患者の顔面の改善に対する化粧の効果

飯田 征二、小原 浩、古郷 幹彦、宮 成典、松矢 篤三
大阪大学歯学部

口唇口蓋裂は本邦においては約500人に1人と高頻度で発生する顎顔面領域の先天性疾患である。本疾患患者に対しては、生後まもなくより口唇形成術、口蓋形成術などの外科的治療を行い、審美的・機能的改善をはかっていくが、機能的な改善をなし得たとしても、解剖学的異常や口唇部手術痕により審美的に多少の非対称感を残すことは否めない。本研究では、口唇口蓋裂患者の顔貌の非対称感が、基本的な化粧技術によってどの程度改善しうるのかを明らかとする目的で、顔面の三次元形態の計測と化粧を行った顔面から受ける第三者の印象の違いについてアンケートを中心とした検討を行った。

【結果および考察】

濃淡をつけず単色にてファンデーションを施し、口紅については色調に変化をもたせ、これら化粧による影響を検討し、以下の結果が得られた。

- 1)ファンデーションを均一に顔面に塗布することにより、中顔面の陥凹感および非対称性が改善していることが確認された。このことはファンデーションに濃淡を設けることにより、よりこれら審美的障害が視覚的に改善されることを示唆するものと考えられた。
- 2)白唇部の手術痕に関しては、ファンデーションの塗布により良好な改善がみられ、本疾患に対する化粧によるマスキングの有効性が確認された。しかし、外鼻孔底部の手術痕に対しては、ファンデーションの効果は期待できず、同部での特殊な化粧法の応用の必要性が感じられた。
- 3)口唇形態に就いては、口紅の使用により審美的改善がはかられることが示された。特に、赤色系の濃い口紅で良好な結果がえられることが確認された。これは、同色系により赤唇の量的増大感を引き起こすことと、評価者に心理的側面の影響が考えられた。一方、淡色系での改善効果が低かった原因としては、量的増大感が少なく立体感の付与が乏しいことが考えられた。
- 4)外鼻形態については、今回の検討では化粧による効果は観察されなかった。このことはファンデーションを均一に塗布させていることが原因であると考えられ、意図的に濃淡をつけた化粧方法により、視覚的な改善は可能ではないかと考えられた。